

壺中之展の「禅」ノート——武家肖像と法語草子——

知念 理

特別陳列「開館八十周年記念展 壺中之展——美術館的小宇宙」(以下「壺」展という)の開催にあたり、稿者は「第三章日本美術①」桃山人——肖像画レクイエム」、「第五章仏教美術 尊キモノ」、「第六章近代美術 想い出のおおさか」の各章で構成、展示を担当した。小稿ではその出品作品、作家に関する研究ノート、最近のトピックスを報告し、展覧会場における情報提供の不足を補っておきたい

一 「華嚴院殿日昇先公大禪定門像」の像主

「第三章日本美術① 桃山人——肖像画レクイエム」では武家とその夫人の肖像画を特集した。多くは昭和十一年の開館から間もない時期に妙心寺塔頭などから寄託を受けた品々である。什物としての性格上、頂相の寄託となると寺院側にとってもハードルが高かったのかもしれない。しかしこれら優れた武家肖像画の寄託実現は、太閤豊臣秀吉ブランドを意識した美術館スタッフにより推し進められた戦略的な作品収集、美術館活動として今日改めて評価される。長きにわたる関係寺院のご協力に対し、紙面を借りてまずは深く御礼申し上げたい。

出品目録No.56京都・霊雲院蔵「華嚴院殿日昇先公大禪定門像」は、室町時代終わりから桃山時代にかけて(十六世紀後半)の標準的な服制による武家肖像画である^①。白地小袖、浅葱色地に桐紋を配した大紋を着する侍烏帽子姿で、右手に扇をとり、脇差を差し、素足で畳に座す。細い眉と切れ長の目尻をつり上げた細面の顔貌には像主の神経質そうな性格がうかがわれる。脇差の柄、內衣の襟の縁に切金が置かれ、扇や大紋の胸紐を金泥で彩るなど丁寧な作画が見られる。頭上には、妙心寺霊雲派下、特芳禅傑——大休宗休の法を嗣ぐ東庵宗暲(一五一五〜九一・妙心寺四十九世)による天正十二年(一五八四)五月の賛がある。文事に長じ、禅の修養にも努めたらしい像主の高潔な人柄を悼んでいる^②。

(朱文印)

華嚴院殿日昇先公大禪定門肖像

一門人物四海英雄、清和之王子王孫

高哉名位、武衛之難兄難弟大矣、化工

将謂乾坤握掌元来天地貫忠、筆勢霧

結烟霏蘭亭重三之王逸少、扇子風清
月皓梅花千億之陸放翁、瞞白拈臨濟
而提三尺劍、罵碧眼胡僧張九年弓而
轉萊、華嚴經天墀禮樂三千字、參祖
師碧岩集、海国鯤鵬九万風、玄々々、列
聖叢阿誰●身●、●々々、選仏場居士
叫心空要看真相麼、扶桑依旧日昇東

天正十二甲申夏五吉辰

前花園東庵拙叟宗暎書〔東庵〕〔宗暎〕〔朱文印〕

本作はかつて「妙心寺名宝展覽会」(昭和十年、恩賜京都博物館)に出品され、展覽会直後に刊行された『妙心寺名宝図録』に図版掲載された(図二〇—中)。その後は妙心寺関係展覽会に出品なく、『妙心寺大観』(昭和四十七年)、宮島新一『日本の美術三八五 武家の肖像』(平成十年)にも収録されていない。この間の大阪市立美術館常設展での出陳機会もごく限られており、像主の特定は等閑視されてきた。

今回「壺」展の準備に取り掛かってみると、この問題についてはすでに妙心寺龍華院の学僧、無著道忠(一六五三—一七四四)による言及があることがすぐにわかった。その著『正法山誌』第九卷・靈雲院の条の關係箇所を引用する。³⁾

華嚴院肖像(靈雲院) 靈雲院。祠堂有華嚴院肖像。東菴和尚贊

曰。武衛之難兄難弟。(止此)武衛即衡陽院。太嶺院有牌。所謂武衛細川之武衛也。靈雲院。有華嚴院祠堂料之契券。天正十四

年也。

武衛細川崑山爲三管領。武衛者斯波氏也。世々任左兵衛。故稱武衛。太嶺院之檀越武衛者。足利尾張守。〔領越前尾張遠江三國〕三代之孫也。龍安。東菴和尚之檀越也。〔此時東菴。隨檀越所在之國。〕

密宗受業於東菴。而嗣法於鐵山。建立今之太嶺菴。仍東菴。以太嶺付囑密宗。始名太嶺。〔東菴時不名太嶺〕武衛之末孫。今仕豫州松平隱岐守。隱岐崇其貴族不敢輕之。

無著が本作の賛語中「武衛之難兄難弟」の句に注目し、足利氏の一門で幕府三管領家の一つ、室町時代の諸史料で武衛(兵衛府長官職位の唐名)と呼ばれる尾張守護斯波氏を連想したのは妥当であった。その前の句「清和之王子王孫高哉名位」から続いて、斯波一族、しかも並び立つ兄弟の存在を念頭においた賛であることは間違いない。

浅葱色地の大紋には桐紋がみえるが、足利氏と同様に斯波氏も二つ引両と桐紋を用いた家柄である。ただし無著は、「武衛」とは大嶺院(現大龍院)に位牌がある「衡陽院」のことであり、また靈雲院には「華嚴院」の祠堂料の契券がある、と述べるのみで、武衛の「衡陽院」と像主である「華嚴院」との双方の關係性については考察が及んでいない。

「衡陽院」とは「衡陽院殿龐山蘊公大居士」⁴⁾、つまり尾張守護斯波義統の子、斯波氏最後の当主である義近(一五四〇—一六〇〇)のことである。斯波義銀、あるいは改名後の津川義近の名でも知られ、史料には「武衛」のほか入道号の「三松軒」の名で出てくる。義近

は本作の着賛者である東庵宗暎の壇越であり、天正三年（一五七五）には東庵を開祖として、妙心寺に衡陽院（大嶺院、さらに現在の大龍院に継承）を開創している点にまずは留意される。⁵⁾

父義統が守護代織田信友に襲撃されて自害した後、義近は織田信長を頼ったが、永禄四年（一五六一）尾張を追われ、守護大名斯波氏はその分国をすべて失い滅亡した。秀吉の時代にはお伽衆に列し大坂で茶会に出席するなど、織田家の主筋である名族の格付けを保ちながら生き延びた。その子孫は伊予松山松平家、肥後細川家の家臣として存続した。⁶⁾

さて、本作の像主は、賛にみえる法名「華嚴院殿日昇先公大禪定門」からして義近とは明らかに別人である。だが天正十二年五月という賛の年紀に注目すると、無著が指摘した武衛（斯波改め津川）一族のなかに、確かにこの時期に遺像をもって供養されるにふさわしい経歴を有する人物がいることに気付く。

まず一人は、三人の存在が確認される義近の弟の一人、津川玄蕃允雄光で、通常、津川義冬の名で知られる武将である。津川雄光（？一五八四）は初め織田信長に仕え、本能寺の変後は織田信雄に従い伊勢松ヶ島城主となる。信雄と豊臣秀吉との対立が深まると、秀吉の調略で雄光ら重臣の寝返りが疑われ、天正十二年（一五八四）三月、雄光ら三家老が信雄によって誅殺される事態が生じた。⁷⁾

この騒動を契機に小牧・長久手の戦いが始まるが、雄光が殺害された直後、義近と、そのもう一人の弟である蜂屋謙人、伯父の津川弥太郎らが松ヶ島城に籠城した。しかし信雄方の木造軍に攻められて敗退し、この時津川弥太郎が討死を遂げている。⁸⁾『系図纂要』の斯波系図にみえる義長（津川弥太郎）がその人で、本作の像主にあて

るべき二人目の候補者となる。⁹⁾

義近はこの時点で四十五歳、永正十年（一五一一）生まれの父義統との比較で考えると、討死した伯父義長は若くても五十代半ばであろう。しかしながら本作の武家は、弛みや皺の目立たないシャープな顔貌をみせ、三十代半ば壮年期の風貌を写すとみるべきで、年齢的な条件に合致するのは義近の弟津川雄光ということになる。

そして東庵の着賛は雄光の誅殺からわずか二ヶ月足らず後のことである。つまり「華嚴院殿日昇先公大禪定門像」は、織田信雄家臣、津川雄光の非業の死を悼むべく、その兄義近が自らも松ヶ島籠城戦に破れた直後に制作（および着賛）させたものではなかったか。

東庵が天正三年に義近が開いた衡陽院の開祖であることは前述のとおりであるが、妙心寺に出世した永禄九年（一五六六）の「東庵入寺開堂法語」（岐阜・大仙寺蔵『東庵法語』所収）には、「壇越」に「故武衛將軍」の語がある。これは天文二十二年（翌年ともされる）に没している義近の父義統を指すだろう。また元龜二年（一五七二）七月には「大壇越」であった義近から「父像」への賛を求められている（『同右』所収¹⁰⁾）。このような東庵と斯波武衛家の菩提との深い関係性からも、一族である津川雄光の没後すぐの遺像着賛という事象が十分ありえたことが理解される。

東庵は八歳で出家した後妙心寺に入り、靈雲院を創建した大休宗休の門下で修行した。天文十四年（一五四五）には大休から自賛頂相（印可）を与えられ、藤枝の長慶寺、瀬戸の定光寺などを経て、永禄九年妙心寺出世。元龜二年再住、同三年犬山の瑞泉寺に輪番住山し、天正五〜六年（一五七七〜八）三住、以後長慶寺に退休するも、晩年に四住も果たしたようである。天正十九年、長慶寺で示寂。¹¹⁾

本作が霊雲院に納められたのは、東庵の晩年中、『正法山誌』が華嚴院の祠堂料契券に触れている天正十四年頃が一応の目安になる。小牧・長久手の戦い以降、秀吉の支配下に入った義近の没落で衡陽院は退転していたためであろう。それにしても霊雲院で「華嚴院殿」が誰なのか不明となった事情についてはよくわからない。

というのも、東庵の弟子密宗宗頭により衡陽院の後身となる大嶺院が開創されており、義近とその次男近利の位牌や、義近肖像(寛永十年賛)が安置されている。¹²⁾つまり、弟雄光ほか先没した津川(斯波)一族の菩提はともに引き取られなかったのだろうか。華嚴院殿の位牌などの確認と合わせ今後の課題としたい。

註

1 一幅、絹本着色、七三・九×三六・五センチ。軸箱はなく、巻絹に「華嚴院殿肖像」、「文化十五年戊寅春修補」の墨書がある。本作画像については、東京大学史料編纂所・所蔵資料目録データベースから模写本(模写一呂一四〇)を参照のこと。

2 岐阜・正傳寺蔵「以安智察頂相」に天正十五年の東庵賛がある。『岐阜県史史料編古代・中世二』(昭和四十七年)、および『延宝伝燈録』巻第三十一(『大日本仏教全書』)参照。また、東庵の法嗣である雪叟紹立の『雪叟詩集』(豊橋・太平寺蔵)は東庵関係の詩文を多数収録するが(芹澤勝弘『雪叟詩集訓注』、思文閣出版、平成二十七年)、本作の賛語は見当たらない。無著道忠『正法山誌全』、思文閣、昭和五十年。

4 『武衛系図』(『続群書類聚 第五輯上(系図部)』)、京都・大龍院蔵「斯波義近画像」(東京大学史料編纂所・所蔵資料目録データベース模写本/模写一以一一一)。

5 『増補妙心寺史』、思文閣出版、昭和五十年。

6 津川義近、後述の津川雄光ら戦国期の斯波氏については、さしあたり以下

の文献を参照した。木下聡「総論 斯波氏の動向と系譜」、同編『シリーズ室町幕府の研究①管領斯波氏』(戎光祥出版、平成二十七年)所収。谷口克広『織田信長家臣人名事典』(第二版)、吉川弘文館、平成七年。

7 『大日本史料第十一編之五』、天正十二年三月六日条。
8 『同右』同日条所収の『勢州軍記』ほか。

9 前掲註6木下編『同書』の斯波氏系図には、義統の弟義近、雄光の伯父として整理されている。ただし名を「小太郎」とするが、『系図纂要』、『勢州軍記』では「弥太郎」とされる。木下「同論文」中にも「松島城での合戦で討死した小太郎義長がいる。」との記述がある。

10 横山住雄『中世武士選書⑩織田信長の尾張時代』(戎光祥出版、平成二十四年)では義統像とされるが、前掲註6木下「同論文」は祖父の義敦像(永禄十二年没か)と解する。

11 東庵の経歴については、横山住雄『瑞泉寺史』(思文閣出版、平成二十二年)第二章を主に参照し、横山住雄氏のご教示により補った。関係資料をご教示下さった同氏、および土山公仁氏(岐阜市歴史博物館)に御礼申し上げる。なお『増補妙心寺史』には東庵の師の大休が中興した龍安寺西源院との関係にふれるが今回未考である。
12 前掲註4参照。

二 「幻中草打画」―目覚めた骸骨

国指定文化財である仏画と仏像がぎっしりと並んだ「第五章仏教美術 尊キモノ」の展示室で異彩を放ったのが、出品目録No.218大阪・鶴満寺蔵「幻中草打画」(一卷、紙本墨画墨書、二六×八一〇cm)である。もと冊子本を裁断して江戸時代には現在見るような巻子へ改装されており、木箱墨書には鶴満寺壇越の大阪商人上田氏による寄付施入、東福寺の書記であった正徹(一三八一―一四五九)の書写が伝えられる。

後崇光院貞成親王筆『看聞日記』紙背文書、応永二十七年(二四二〇)の「諸物語目録」に「幻中草打画一帖」が記載され、少なくとも室町前期には成立し享受されていた物語草子であることがわかる。その内容は、夢中で骸骨の一生(酒宴・男女抱擁・死・野辺送り・出家・行脚・仏教問答)を見聞きした僧が、人間も骸骨も皮一枚の違いで、生と死とは区別されるものではないことを悟り、その真理を絵説きして語る前半と、骸骨の比丘尼二人が説教の道歌を織り交ぜつつ禅の教えに基づく仏道問答を展開する後半から成る。

鶴満寺本は戦前、当館の開館直後にも一時寄託されていた時期があり、望月信成氏(後の当館館長)が早くに作品紹介したが、戦後は国文学者の岡見正雄氏により翻刻紹介されたのみで、長らく研究者らの関心を引くところではなかった。ところが近年、恋田知子氏(国文学研究資料館)の精力的な調査により新たな伝本の発掘、考察が展開され、その文芸史的意義が本格的に論じられるようになった。¹⁾

長らく深い眠りにおちていた骸骨たちを激しく揺さぶる氏の一連の論著がなければ、鶴満寺本の再寄託、今回の「壺」展における(恐

らく初の)展示公開に巡りいたることはなかったであろう。

「幻中草打」(げんちゅうそうだ、げんちゅうくさうち)とは、夢中に現れた骸骨の姿から現世の「空」なることを悟らせる、という意味に解釈されている。「生死一如」観に基づく難解な禅の教義を女性に平易に説く法語的草子で、『一休骸骨』など仮名草子の先蹤作と位置づけられる。「ものいう骸骨」が当代宗教者の墮落を批判する手法は、室町期の異類物絵巻と通じる性格も認められよう。これまで四本の伝本が明らかにされ、康暦二年(一三八〇)の本奥書をもつ鶴満寺本は室町後期まではさかのぼる古写本とみられている。

「壺」展会場ではケースの尺がやや不足し、鶴満寺本の骸骨画全体を開示できなかった。改めてここにその挿絵全十図【図1】～【図4】を掲載し、広く作品理解に供することとしたい。

さいごに、写真掲載をご許可いただいた鶴満寺に対して御礼申し上げる次第である。

註

1 望月信成「幻中草打画」、『宝雲』二十五冊、昭和十四年。

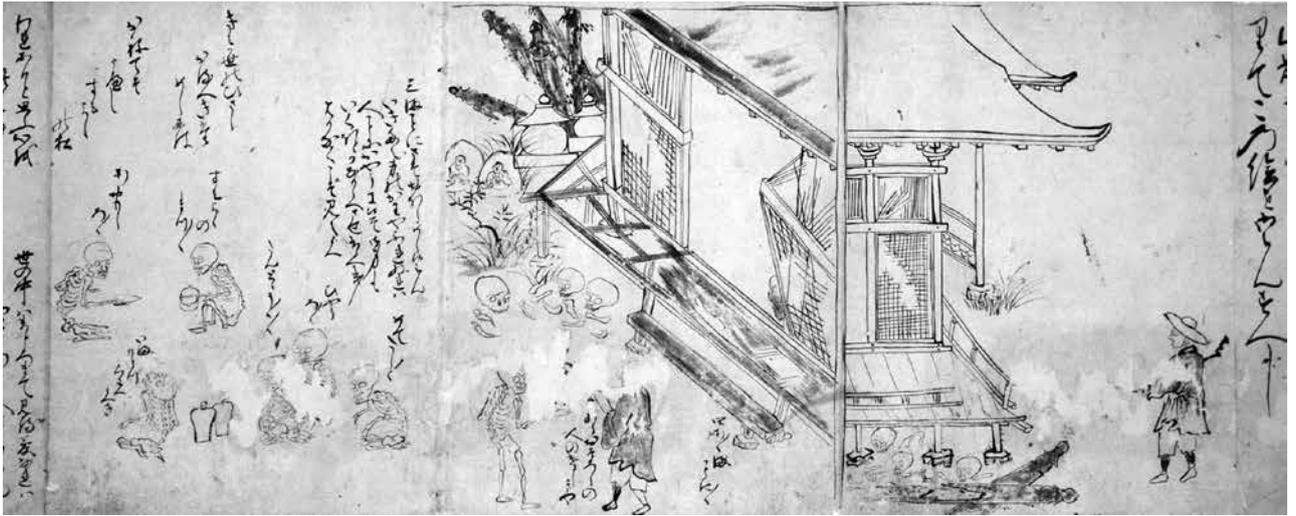
岡見正雄「『幻中草打画』翻刻」、『近世文学 作家と作品』(中央公論社、昭和四十八年)所収。

恋田知子「説法・法談のヲコ絵―『幻中草打画』の諸本―」、『仏と女の室町―物語草子論―』(笠間書院、平成二十年)所収。

同右「室町の信仰と物語草子―骸骨の物語絵をめぐって―」、『国文研ニュース』No.40、平成二十七年。

同右「骸骨の物語草子―『幻中草打画』再考―」、『禅からみた日本中世の文化と社会』(ぺりかん社、平成二十八年)所収。

同右「骸骨の絵ものがたりのルーツ」、『越境する絵ものがたり』(西尾市岩瀬文庫、平成二十八年)所収。



【図1】



【図2】



【図3】



【図4】



【図5】

三 大阪の洋画家・松本鋭次年譜

さいごに、「第六章近代美術 想い出のおおさか」から洋画家・松本鋭次(一八九四〜一九六八)に関する最新のトピックスを報告しておきたい。出品目録No.223本館蔵「工事場風景(地下鉄工事)」(二二七・五×一九〇・三cm、【図5】)はその代表作のひとつで、前年の「地下鉄工事作業場」とともにモダニズム香る「大大阪」時代をユニークなモチーフで切り取った印象深い作品である。

松本が晩年に本館付設の美術研究所の講師を五年間務めた縁であろうか、松本のご遺族から本作を含む五点の作品寄贈を受けている。それから今日まで半世紀が経過するも、確かな経歴や現存作品の確認は進められておらず、各種展覧会カタログの断片的な記述の他にはまとまった文献、資料は出されていない。

松本鋭次を紹介する公開講座「新美術館×図書館わくわくコラボ技術(アート)と美術(アート) マルキ製パンと大阪の美術」(於大阪市立中央図書館)が開かれたのは、「壺」展終了の翌々週(十二月十七日)のことであった。松本作品の「壺」展出品のタイミングとの奇遇に少々驚きつつ(逆に佐伯や小出の話なら聞き過ぎではない)チラシを手にした。

講座前半が松本の話題で、「大阪のパリジャン 洋画家・松本鋭次」と題して小川知子氏(大阪新美術館建設準備室)が、松本の渡欧先(パリ)での人間関係やアトリエの様子を紹介し、出品当時の作品評を交えながら主要作品についてスライドレクチャーされた。その際にレジュメとして出品歴、現存作品が一覧できる年譜が配布された。今後松本を再評価するための基本事項の整理として重要であり、本

紙面に掲載させていただくこと
とした。松本鋭次、ひいてはそ
の周辺の洋画家をめぐる情報収
集のきっかけともなれば幸いで
ある。

さいごに、年譜掲載を快くご
承諾くださった小川氏、ならび
に大阪新美術館建設準備室のご
厚意に感謝申し上げる次第であ
る。

(大阪市内立美術館主任学芸員)

松本 鋭次 (まつもと・えいじ) 1894～1968 年譜

年譜編集：大阪新美術館建設準備室

年	歳	
1894 (明治 27)		大阪に生まれる (豊能郡箕面村)
		松原三五郎、赤松麟作に師事
1922 (大正 11)	28	東京美術学校西洋画科を卒業 同期生で「等迦会」結成 (同期に鈴木誠、佐分真、小野藤一郎ら)
1923 (大正 12)	29	フランスへ渡航
		滞仏中、サロン・ドートンヌに出品
1927 (昭和 2)	33	パリ滞在中、マルキ號製パン (大阪) の水谷政次郎がアトリエを訪問
1928 (昭和 3)	34	帰国 第9回帝展に初入選《少女坐像》 ※東京から出品
1929 (昭和 4)	35	「艸園会」会員となる 同年、第6回艸園会展で滞欧作品を発表
1930 (昭和 5)	36	第11回帝展に《黄衣婦人》★ ※大阪から出品、以下同
		この頃から「赤松洋画研究所」講師 (～1944 心齋橋・丹平ハウス内) この頃から最晩年まで、箕面市牧落百楽荘に居住
1931 (昭和 6)	37	第12回帝展に《地下鉄工事作業場》
1932 (昭和 7)	38	第13回帝展に《工事場風景》★
1933 (昭和 8)	39	第14回帝展に《婦人裁縫師》
1937 (昭和 12)	43	「大阪新美術家同盟」代表を務める
1938 (昭和 13)	44	第2回新文展《新聞を売る女》★ ※最後の官展出品
1955 (昭和 30)	61	「新世紀美術協会」設立に参加、同会で活動
1957 (昭和 32)	63	第7回関西総合美術展覧会で審査員を務める (出品《ペンキの缶》)
		以後、同8回 (1958)・市制70周年記念関西展 (1959)・14回 (1965)・ 16回 (1967) への出品を確認 ※現在の全関西美術展およびその前身
1963 (昭和 38)	69	「大阪市立美術研究所」講師 (1963～68)
1968 (昭和 43)	74	死去 ※一説に1969年
		遺族より大阪市立美術館、山梨県立美術館へ作品寄贈

【確認されている松本鋭次作品】 (上記★を含む)

◇大阪市立美術館：《黄衣婦人》(現《少女像》)、《工事場風景》(現《地下鉄工事》)

《新聞を売る女》《牛乳売りの少年像》《西洋婦人像》 5点

◇山梨県立美術館：《パンと梨》《緑衣婦人》 2点

◇個人蔵：《裸婦》 1点